



Title	英語の命令文
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 30, p. 29-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の命令文

舟 阪 晃

ENGLISH IMPERATIVE SENTENCES

AKIRA FUNASAKA

In this paper we discuss the problems on English imperative sentences, first from the view that imperative sentences come from *You will* sentence, and next from the point of view of Performative Analysis. In conclusion, we support Performative Analysis as more convincing and revealing explanation for imperative sentences and, finally, present a few problems which come up when we follow Performative Analysis.

0. 本稿の目的は英語の命令文について考察することである。まず、最初に、*You will* 文から命令文が派生されるという説を検討し、つぎに、performative analysis の立場から考察を加え、二三の問題点を指摘したいと思う。

1. *You will* 文

英語の命令文を *You will* 文から派生させるという考え方は多くの人から支持されてきた。これはつぎのような言語事実に基づいたものである。

- (1) a. You wash yourself.
b. Wash yourself.
c. He washes himself.
d. *You wash himself.^①
e. *Wash himself.
- (2) a. Open the window, will you?
b. Open the window, won't you?
c. You will open the window, won't you?
d. *Open the window, will John?
e. Open the window, John, will you?
f. *Open the window, will boys?
g. Boys, open the window, will you?

(1 b.) は命令文であるが、再帰代名詞化の条件を考えてみると、主語の位置に *you* があると考えられる。⁹⁾ このことは (1 c.) (1 d.) (1 e.) から明らかである。したがって、(1 b.) の基底には (1 a.) のような構造があることになる。(1 a.) の *yourself* と (1 b.) のそれとは、それぞれの基底においてはちがっているが、今問題にしているレベルで偶然一致したという考えも不可能ではないが、そのような考え方をとらない方がより一般的な説明ができることになる。さらに、(2 d.) (2 e.) (2 f.) (2 g.) から主語は *John* や *boys* ではなく *you* であることが確認できる。

(2 c.) はいわゆる tag question の例であるが、これと、(2) の他の文とを比較してみると、(2 c.) 以外の文にも基底構造では主節に *will* があると考えることができる。意味的にげんみつにみるなら、(2 a.) の基底にあるであろう *will* と (2 c.) のそれとはすべての点でまったく同じであるとはいえないが、このような解釈をすればより一般的な説明ができることになる。

1.1. Hasegawa (1965) は命令文を *You will* 文から派生するルールを設定したのであるが、つぎに、このルールを検討してみたいと思う。

Timperative⁹⁾

$$SD : \underbrace{you \text{ (pl)}}_{X_1} \underbrace{Pres}_{X_2} + \underbrace{will}_{X_3} \left\{ \begin{array}{l} (E) \text{ (n't)} \\ (not)(E) \end{array} \right\}_{X_4} X_5$$

$$\text{条件} : X_5 \neq \# \left\{ \begin{array}{l} \text{Neg} \\ \text{Have} \end{array} \right\}$$

$$SC : 1. (X_1)X_2 + X_3 \rightarrow \emptyset$$

$$\text{条件} : X_4 = \text{null}$$

$$2. X_1 \rightarrow \emptyset, X_3 \rightarrow \emptyset$$

$$\text{条件} : X_4 \neq \text{null}$$

$$3. X_1 + X_2 + X_3 + X_4 \rightarrow X_2 + X_4 + X_1$$

$$\text{条件} : X_4 = E + n't$$

以上のルールによって、つぎのような言語事実がすべて説明されることになる。Come here./ Be careful./ Dó come here! /Dó be careful./ Don't touch that./ Don't be noisy./ You tell him that./ You be careful./ Don't you talk like that to me./ Don't you be noisy.

また、tag question についてはつぎのようなルールが提示されている。⁹⁾

Ttag

$$\left. \begin{array}{l} S \\ S' \end{array} \right\} \rightarrow S+, +S'$$

$$\text{where} : S = NP \text{ (Pre V)} \left\{ \begin{array}{l} \text{Tns} + V \\ \text{Tns} \left\{ \begin{array}{l} M \\ \text{have} \\ \text{be} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \times$$

S' = a transform of S

$$= \left\{ \begin{array}{l} \text{Tns} \\ \text{Tns} \left\{ \begin{array}{l} M \\ \text{have} \\ \text{be} \end{array} \right\} \end{array} \right\} (Y) NP$$

Y=null if Pre V contains *not* or Neg

Y=n't if otherwise

以上のルールによって、以下の文が説明される。Come here, will you? (won't you?) /Be careful, will you? (won't you?) /Dó come here, will you? (won't you?) /Dó be careful, will you? (won't you?) /Don't come, here, will you? /Don't be late, will you? /You tell him that, will you? (won't you?) /You be careful, will you? (won't you?) /Don't you come here, will you?

このように Hasegawa (1965) は多くの命令文を説明することができるのであるが、問題がないわけではない。つぎに、その問題点をあげてみよう。

第一に、(3)と(4)との意味上の関係が説明できない。Hasegawa (1965) は統合論中心の考え方であるから、(3)(4)のようにまったくちがった形の文の間の関係は問題にならない。が、意味面を重視する立場からすれば、(3)と(4)との関係がまったく説明されないということになれば不満が残る。

(3) Come here at once.

(4) I order (command) you to come here at once.

(5) Someone help John, will you?

第二に、(5)のように *you* 以外の要素が主語の位置にくる場合は説明できない。第三に、呼格 (vocative) は扱われていない。第四に、命令文の VERB[®] は +action でなければならないが、その規制が与えられていないから動詞の下位区分が必要になるはずである。格文法的に言えば、agent としての *you* とそうでない *you* との区別がおこなわれていない。第五に、E, *not*, *n't* は命令文以外に、平叙文 (declarative sentence) や疑問文 (interrogative sentence) などにもでてくる項目であるから、どこかで一度だけのべればすむはずである。ただし、(6)(7)は命令文に特異な形であるから命令文の中で説明されるべきであろう。

(6) Dó be careful.

(7) Don't be careful.

第六に、命令文の基底構造の助動詞は *will* だけのようにになっているが、他の助動詞もおこりうる。このことに関しては、Bolinger (1967)[®]も *will* が唯一の助動詞であるとし、(8)(9)をあげて例証している。しかし、ここで問題になるのは、*can* が肯定形であるということと、tag の主語が *you* ではなく *he* であるということであり、*can*そのものが不都合であるとはいえない。例えば、(10)は文法的な文である。

(8) Eat the meat, will you?

(9) *Eat the meat, can he?

(10) Be quiet, can't you?[®]

第七に、tag question のルールの中の Y は随意的な項目になっているが、このようにすると、

肯定の主節のあとにくる *will you?* と *won't you?* とのちがいは随意的なものとなり、両者の意味上のちがいが説明できなくなる。また、(11 d.)は英語として許容されないが、そのことと、(11 c.)が文法的であるということから、肯定の主節のあとにくる *will you?* をいわゆる tag question の中で扱うとすれば、*will you?* は例外的な存在となる。

- (11) a. Open the door, won't you?
 b. Don't open the door, will you?
 c. Open the door, will you?
 d. *Don't open the door, won't you?

1.2. つぎに、Katz-Postal (1964)^⑧ の考え方をみてみよう。Katz-Postal によれば、命令文の基底句標識内に Imp という形態素があり、これによって、基底句標識と派生句標識との間の意味のちがいが吸収され、その結果、変形は意味を変えないという仮設が保持されることになる。

形態素 Imp を用いることにより以下のような説明ができる。

- (12) You will go home.
 (13) a. *Believe the claim.
 b. *Understand the theory.

第一に、(12)の文はあいまいであるが、そのあいまい性は、基底句標識内に Imp があるかないかによって説明される。第二に、(13)にみられるように、動詞が +stative な特性をもつときには命令文にはなりえないということが示される。第三に、(14)(15)にみられる共起関係のちがいを Imp によるものとすることができる。

- (14) a. $\left. \begin{array}{l} \text{Maybe} \\ \text{Yes} \\ \text{Perhaps} \\ \text{.....} \end{array} \right\} \text{you will drive the car.}$
 b. * $\left. \begin{array}{l} \text{Maybe} \\ \text{Yes} \\ \text{Perhaps} \\ \text{.....} \end{array} \right\} \text{drive the car.}$

- (15) a. You will $\left. \begin{array}{l} \text{hardly} \\ \text{scarcely} \end{array} \right\} \text{touch your food.}$
 b. * $\left. \begin{array}{l} \text{Hardly} \\ \text{Scarcely} \end{array} \right\} \text{touch your food.}$

第四に、(16)のように、「補文をとるある種の動詞」を命令文から除くことができる。

- (16) a. *Want to go.
 b. *Hope to be famous.

Imp が恣意的な仮構物であることに眼をつぶれば、(12)(13)の例は説明しやすくなるであろう。しかし、(14)(15)(16)の例については問題が残る。(14 a.)(15 a.)と(14 b.)(15 b.)とはそれぞれ意味がちがうと思われる。つまり、Katz-Postal 流に言えば、(14 a.)(15 a.)の基底標識には

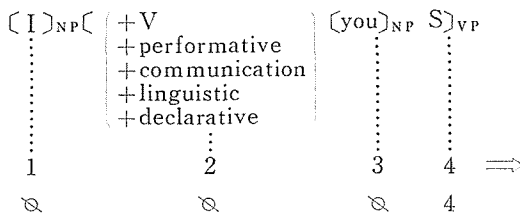
Imp は含まれていないが、(14 b.)(15 b.)の基底標識には Imp が含まれている。したがって、(14)(15)の間の共起関係のちがいを Imp に帰することはできない。また、(16)の例が命令文としては非文法的であるのは、補文をとるある種の動詞があるからではなく、補文には関係なく、+stative な動詞があらわれている点にある。このことは、たとえば、(17)が例証しているであろう。

(17) Try to do it!

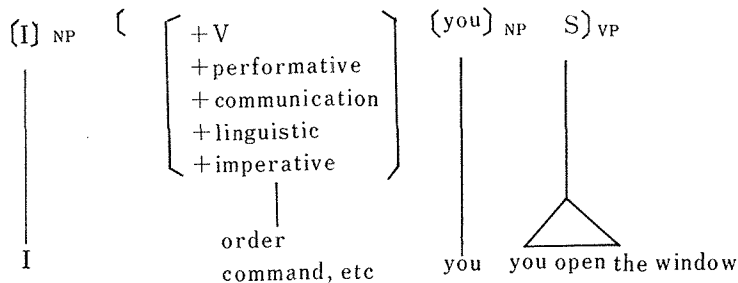
以上のように、基底標識内に命令文変形のひきがねがまったくないよりは、恣意的ではあっても、Imp のような要素がある方がよい。しかし、そのような要素なしで、変形のひきがねが明示できるならそれにこしたことはない。

2. Performative Analysis

2.1. Ross (1969)⁹⁾ によれば、英語の平叙文 (declarative sentence) はつぎのような基底構造をもっていることになる。



2.2. この考え方を命令文にあてはめてみると、その基底構造はつぎのようになる。



I は performative action の行為者、you はその受け手、動詞は命令の意味をもつ performative verb の現在形である。したがって、(18)のような文は命令文ではない。

(18) a. I ordered you to go.

b. I order him to go.

c. I don't order you to go.

(18 a.)は動詞が過去形であり、過去の事実を平叙文で表現したものである。(18 b.)では you のかわりに him があらわれているので、これも平叙文である。(18 c.)は performative action そのものを否定しているのであるから問題外である。また、(19)は命令的な意味をもつ文である

ために、一種の命令文であると分類する人もいるが、performative analysis の立場をとれば平叙文ということになる。

(19) a. You are to be up at six.

b. You are always to shut the door behind you.

Performative analysis をふまえて命令文を考えてみるとつぎのようなことがいえる。まず、第一に、Hasegawa (1965) では無視された(3) (4)の文の関係が説明できる。つまり、(4)に performative deletion を適用すると(3)が派生することになり、両方の文が同一の意味をもつことが示される。

(3) Come here at once.

(4) I order (command) you to come here at once.

第二に、「命令」の意味のちがいが説明しやすい。Schreiber (1972)^⑧によれば、命令文には command imperative と hortative imperative とがあり、それぞれにおいて、様態副詞の下位区分である style disjuncts の分布がちがっているという。hortative というのはあいまいな表現であるが、さらにげんみつにいえば、wish, advise, promise, hope, warn などの区別が可能であろう。このような意味のちがいは performative verb のちがいとして説明でき、上記の style disjuncts のように分布のちがうものがでてきても説明しやすいことになる。

(20) a. Go west, young men.

b. I advise you [you young men go west].

c. I order you [you young men go west].

d. Have a good time.

e. I hope (wish) you [you have a good time].

(20 a.)が(20 b.)から派生したときは、その意味は“advise”となり、(20 c.)から派生したときは“command”となる。また、(20 d.)が(20 e.)から派生するとすると、その意味は“hope”とか“wish”になる。

第三に、命令文の動詞は定動詞ではなく、不定詞であるという直観^⑨が説明しやすい。第四に、命令文の主語 *you* の削除が equi-NP deletion で説明されるため、特別のルールが必要でない。^⑩この点は、呼格との関連で問題がおこるがここではふれないことにする。

(21) a. John and Bill, come here at once.

b. *John or Bill, come here at once.

c. I order you (=John and Bill) to come here at once.

d. *I order you (=John or Bill) to come here at once.

第五に、(21)のような事実が説明しやすい。呼格を performative verb の間接目的語から引きだすことについてはつぎのセクションで検討するつもりであるが、(21 b.)と(21 d.)は許容できない形であると思われる。このことに関しては、間接目的語の位置には等位接続はくるが、離接

接続はこないといっておけば, (21 b.)は決してでてこないことになる。®

第六に, (22)(23)にあるように command imperative の動詞は -stative であるが, hortative imperative の動詞は +stative のこともあるということが説明しやすい。

(22) a. *I order you to know the truth.

b. *Know the truth.

c. *I order you to be glad.

(23)®a. I suggest (to) you that you should be glad that we're leaving.

b. Be glad that we're leaving.

最後に, (24)のような受身形の命令文は, *You will* 文におけるより処理しやすいであろう。

(24) a. Be advised by me.

b. Be guided by your higher nature.

c. Be examined by the doctor.

以上のように, *You will* 文による分析と performative analysis とを比較してみると, 焦点がそれぞれちがっていることは別にしても, 後者の方が説明できる範囲が大きいように思える。後者の問題点については, つぎのセクションでふれることになる。

3. 呼格 (vocative)

3.1. 平叙文における呼格は Thorne (1966)® や Ross (1969) でとりあげられたことがある。いくつかの例をあげてみよう。

(25) Chicago is a very fine city, $\left. \begin{array}{l} \text{young men.} \\ \text{men.} \\ \text{John.} \\ \text{*you.} \\ \text{*somebody.} \end{array} \right\}$

(26)®a. Chicago is a very fine city, $\left. \begin{array}{l} \text{my} \\ \text{*her} \\ \text{*his} \\ \text{*Bill's} \end{array} \right\} \left. \begin{array}{l} \text{darling} \\ \text{boy} \\ \text{friend} \\ \text{son} \\ \text{*lawyer} \\ \text{*rival} \end{array} \right\}$

b. Chicago is a very fine city, your $\left. \begin{array}{l} \text{honor} \\ \text{majesty} \\ \text{excellency} \\ \text{*darling} \\ \text{*boy} \\ \text{*friend} \end{array} \right\}$

(26 a.)できらかなように, 呼格には *my (our)* のみがつき, 他のは排除される。名詞の方にも制限があるようであるが, なぜ *lawyer* や *rival* が不可になるのかはわからない。(26 b.)は決まった表現で名詞の分布は極く限られている。本稿では(25)のような呼格を主に扱っている。

3.2. 命令文における呼格については, まず, Thorne (1966)® の考え方を検討してみたい。

Thorne (1966) によれば, (27)の呼格は(28) のようなルールで派生され, (29)のような句標

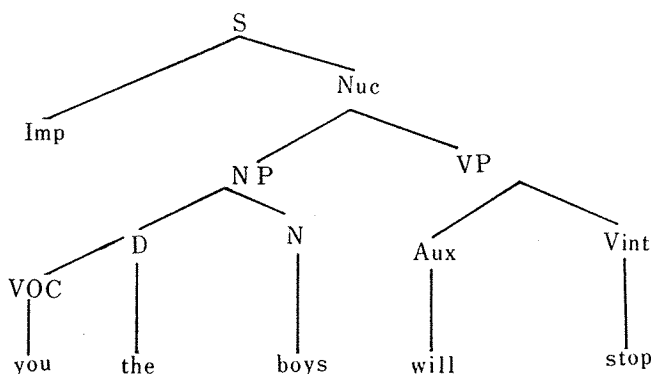
識をもつという。

(27) a. Boys, stop.

b. You boys, stop.

(28) D→voc+the/Imp...N : voc→you

(29)



この説明にはかなり問題があると思う。第一に、voc の地位があきらかでない。(29)によれば voc は構成要素であり、しかも you だけを支配している。もしそうなら、(27 a.)の boys は呼格でなくなり、(27 b.)の You boys は You だけは呼格で boys はそうでなくなる。第二に、呼格と主語（主格）との区別があきらかでない。Thorne (1966)によれば、命令文の表層構造の主語は呼格でなければならない。^⑧ このことは、(28) (29)では説明できないものである。主語すなわち呼格ということになれば、(30)は解釈がつかなくなる。

(30) a. Boys, you stop it.

b. You boys, you come here.^⑨

第三に、(29)からみると、voc は基底構造にその位置をもっているのであるが、一方、(31a.)の yourself は再帰代名詞の呼格形 (vocative form)^⑩ であるとし、(31 b.)の your は所有形容詞の呼格形であるとし、いずれも表層構造に位置づけられている。

(31) a. Wash yourself.

b. Wash your hands.

(32) a. The doctor will examine you.

b. You will be examined by the doctor.

また、(32)についていえば、(32 a.)の you は呼格ではないし、the doctor は you ではないので命令文にはならない。しかし、(32 a.)を受身形にすると(32 b.)になり、you が主語の位置にくるために命令文になりうる。これらのことから呼格を基底構造に位置づけることはできない。

4.1. つぎに、performative analysis における間接目的語、呼格、命令文の主語との関連について考えてみよう。Harada (1971)^⑪によれば、performative verb の間接目的語が削除されずに残った場合には、それが表層構造で呼格としてあらわれるという。この説にしたがえば、呼格

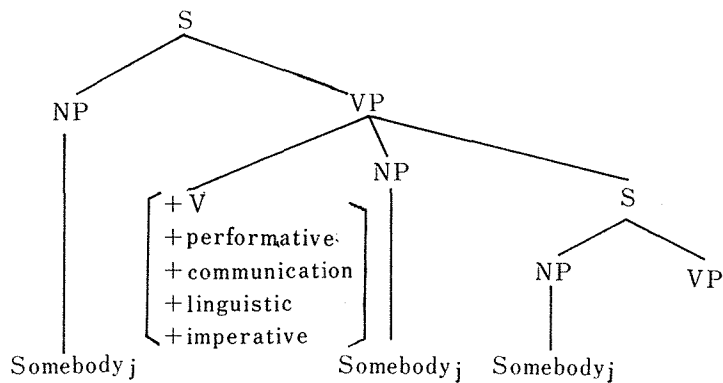
は基底構造ではなく、変形で導入されるということ、また、呼格と命令文の主語との間の同一性などがうまく説明されることになる。しかし、すでにのべた performative analysis では I order you S であったが、ここから呼格を引きだすと(33 a.) のような文がでてしまう。一方、(33 b.) をみると、I order you S のかわりに I order John S が必要になり、これでは performative analysis は不可能になる。

(33) a. *Come here, you.

b. Come here, John.

そこで、(34)のように、I や you を somebody におきかえ、同一性の指標をつければ、この点についての問題はなくなる。

(34)^⑧



しかし、上位のSの間接目的的位置にくるすべての項目が呼格になるわけではないし、また、その項目と下位のSのNPにくる項目とがまったく一致するわけでもない。これらの三つの位置における項目の分布のちがいを考えてみよう。

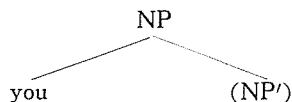
上位のSの間接目的的位置にあらわれるNP	呼 格	下位のSの主語の位置にあらわれるNP
you	*you	you
you men	you men	you men
you young men	you young men	you young men
you John	you John	you John
*men	men	*men
*young men	young men	*young men
*John	John	*John
*somebody	*somebody	somebody
*nobody	*nobody	nobody
everybody	everybody	everybody

(34)の上位Sの間接目的のNPに *men*, *young men*, *John*, *somebody*, *nobody* などがきたと

きは、もはや performative な文ではありえない。一方、呼格として *you, somebody, nobody* がきたときには文法的な文としては容認できないようである。もっとも、このうち *somebody* と *nobody* とは上位 S の間接目的にもあらわれないのであるから、performative analysis の立場をとるかぎり、これらの項目が呼格になることはない。間接目的の位置では *men, young men, John* などとはあらわれないが、呼格としてはこれらは自由にあらわれうる。また、下位の S の主語の位置にくる NP の項目は間接目的の NP のそれと類似しているが、*somebody, nobody* が認められる点ではちがっている。

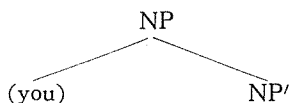
somebody, nobody, everybody を除いて、上の分布上のちがいをまとめてみよう。間接目的の NP と下位 S の主語の NP の分布は同じになる。両者を通じて、*men, young men, John* はそれぞれ自体としてはあらわれないのであるが、それらの前に *you* がつけば認められることになる。これらの事実をまとめてみると、上位 S の目的の NP と下位 S の主語の NP は(35)のようになる。

(35)⊗



一方、呼格の分布は(36)のようにまとめられる。

(36)



以上のように考えると、間接目的が呼格になるとき、また、間接目的によって下位の S の主語が削除されるとき、とくに、主語の一部が削除されるときには、ある種の規則が必要ということになる。もちろん、*equi-NP deletion* で NP 全体が削除される場合は、問題はかんたんであるが、実際には NP の一部の構成要素のみが削除されるということがあるわけである。

なお、(26)にあげた呼格も(36)のような構造から派生したもののように思える。

4.2. つぎに、命令文にあらわれる助動詞をとりあげてみよう。(2)であげたように、命令文の tag には *will* がよくあらわれるために、基底構造内に *will* を設定するのがふつうであるが、この *will* の意味は何であろうか。Jespersen[⊗]によれば、命令（依頼）の内容は将来それが実現されることを前提としているのであるから、その時制は未来でなければならないとする。このことは Bolinger (1976)[⊗] もあるところでは支持しているのであるが、別のところ[⊗] ではちがったことを主張している。つまり、命令文の *will* は「未来プラス命令」ではなく、未来をあらわす *will* と同音異義の項目であるとしている。いいかえれば、命令文の未来性は *will* のためではなく、命令文そのものがもつ性質からくるものであるといっているようである。

一方、McCawley (1968)[⊗] は tag question の tag と命令文の tag とはちがったものであると考えている。この根拠として、彼は(37)のような例をあげている。

(37) a. Mary is pretty, isn't she? Yes, she is.

b. Open it, will you? *Yes, you will.

(37 a.)はふつうの tag question で *Yes, she is.* という返答が可能であるが, (37 b.)では *Yes, you will.* とはいえない。しかし, このことは命令文だけの問題ではなく, (38) のような平叙文においても同じことがいえる。つまり, 問題は, 命令文だからというのではなく, tag の主語が *you* だからということになる。したがって, McCawley のいうように両方の tag を区別する必要はないように思える。

(38) You are honest, aren't you? *Yes, you are.

結論的にいえば, 命令の素性をもつ performative verb が上位の S にあらわれるときには, 下位の S の中に, 命令の未来性に反しないような法助動詞があらわれうると考えてよいであろう。また, 命令の tag は tag question の tag と同じように扱われるべきであるといったのであるが, 命令文の主節が肯定で tag が肯定の場合はふつうの tag question とは規則性がちがうわけだから別扱いされるべきである。

5. 以上, 命令文について, *You will* 文にもとづいた分析と performative analysis とから検討を加えてきたのであるが, つぎのことがあきらかになった。

〔1〕 *You will* 文にもとづいた分析よりは performative analysis の方がより多くのことが説明できる。

〔2〕 命令文のこまかい意味のちがいは performative verb のちがいとして表現される。

〔3〕 呼格は上位 S の間接目的語から派生されるが, 制限が必要である。

〔4〕 下位の S の主語は上位の S の間接目的語をもとに削除されるが, これにも制限が必要である。

〔5〕 命令文中の助動詞は tag 変形により tag question になるが, 主節が肯定で tag が肯定のときは別扱いが必要である。

〔6〕 命令文中の VERB が形容詞であるときは, *Do be careful./Don't be careless.* という特別の形がでるために別扱にする必要がある。

(1973年9月14日)

注

① *は ungrammatical または unacceptable.

② Bolinger (1967, 336) のいう echo question は問題外である。e. g. *Don't kill yourself. Don't kill myself! Why should I?*

③ Hasegawa (1965) 25.

④ *Ibid.*, 28.

⑤ VERB は動詞と形容詞を含むと考える。

⑥ Bolinger (1967) 335. ただし, 他のところでは *will* 以外の助動詞も認めている。

⑦ Huddleston (1970) 218. 他に同様の例は Curme, Jespersen 等。

- ⑧ Katz-Postal (1964) 74 f.
 ⑨ Ross (1972) 249.
 ⑩ Schreiber (1972) 340.
 ⑪ Jespersen *MEG* IV 7.4(1) and Bolinger (1967) 351 & 359.
 ⑫ McCawley (1968) 156.
 ⑬ *everybody* は呼格になりうるが, *somebody* は呼格にならない。この事実も同じように説明できるように思われる。
 ⑭ Schreiber (1972) 342.
 ⑮ Thorne (1966) 75.
 ⑯ Ross (1969) 237 & 266 n.
 ⑰ Thorne (1966) 71—73.
 ⑱ *Ibid.*, 74.
 ⑲ *Ibid.*, 75. Thorne によればこの文は “not impossible”.
 ⑳ Harada (1971) 11.
 ㉑ Postal (1969) & McCawley (1968).
 ㉒ 次のような反例もある。Bring out my hat, somebody, will you! Jespersen, *Essentials*, 15. 42.
 ㉓ cf. Postal (1969) 219.
 ㉔ Jespersen *MEG* IV 7. 4(1).
 ㉕ Bolinger (1967) 338.
 ㉖ *Ibid.*, 339.
 ㉗ McCawley (1968) 159.

BIBLIOGRAPHY

- Bolinger, Dwight L.: “The imperative in English” in *To Honor Roman Jakobson* (The Hague: Mouton), 1967, 335—62.
 Harada, S. I.: “Where do vocatives come from?” in *English Linguistics* 5(1971), 2—43.
 Hasegawa, Kinsuke: “English imperatives” in *Nakajima Fumio Kyoozyu Kanreki Kinen Ronbunshuu* (Tokyo: Kenkyusha), 1965, 20—8.
 Huddleston, Rodney: “Two approaches to the analysis of tags” *JL* 6(1970) 215—22.
 Jespersen, O.: *Essentials of English Grammar*, London: Allen, 1933.
 : *Modern English Grammar IV*, London: Allen & Unwin, 1942—54.
 Katz, J. J. & Postal, P. M.: *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*, The M. I. T. Press, 1964.
 McCawley, James D.: “The role of semantics in a grammar” in Bach-Harms(eds.) *Universals in Linguistic Theory*, 1968, 125—69.
 Postal, Paul M.: “On so-called “pronouns” in English” in Reibel-Schane(eds.) *Modern Studies in English*, 1969, 201—224.
 Ross, John Robert: “On declarative sentences” in Jacobs-Rosenbaum(eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 1969.
 Schreiber, Peter A.: “Style disjuncts and the performative analysis” *LI* 3(1972) 3, 321—47.
 Thorne, J. P.: “English imperative sentences” *JL* 2(1966), 69—78.